ヤマカガシ　*Rhabdophis tigrinus* (Boie)

【選定理由】

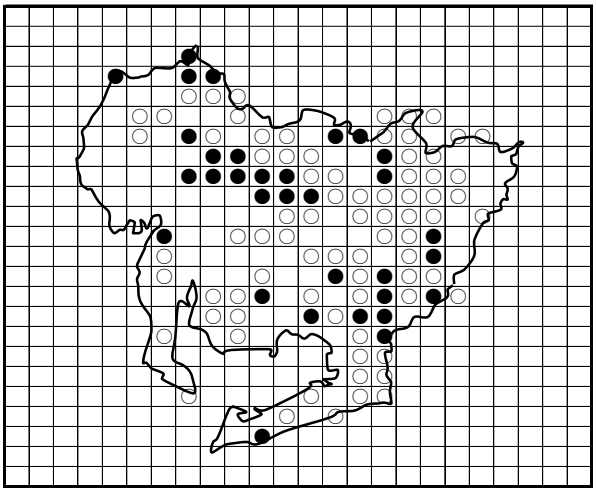
かつては水田に多いカエル食のヘビの代表格であった種だが、愛知県内の減少傾向は顕著であり、平野部ではほとんど目にすることがなくなってしまった。丘陵地では水田や河川沿いに生き残っているが、詳細な分布や個体数密度は不明であり、今後もさらなる減少が予想されることから、情報不足とされた。

新城市, 2015 年 7 月 5 日,島田知彦 撮影

【形　態】

頭部は頸部より明らかに大きく、吻は短くて幅が広い。体色には変異が多くて包括的に記載するのが難しいが、普通は基色が緑色を帯びた褐色か暗褐色で、頸部から胴部には黒斑が並んでおり、黒斑の間に不規則な赤い模様が混じっている。後頭部には口角の後ろから背面へ回る黄色い横帯がある。胴体中央の体鱗は 19 列で顕著なキールを持つ。腹板は 150～170 枚。瞳孔は円形。全長 60～120cm とされるが、普通は 80cm 以下の個体が多い。

県内分布図



【分布の概要】

日本固有種。国内では本州、四国、九州、とその周辺の一部の島嶼に分布。県内ではかつては全県的に分布していたと考えられるが、最近の記録は山地、丘陵部に限られる。

【生息地の環境／生態的特性】

餌動物としてカエル類や魚類を捕食することから、水辺に近い湿潤な環境を好む。産卵期は 6～8 月で 2～40 個ほどの卵を産卵する。顎の後ろには毒腺を持ち、上あごの後ろにある大きな歯で咬まれた場合には毒液が注入されることがある。また、この毒とは別に、捕食したヒキガエルから得られた毒を頸部の皮膚の下にある 2 列の毒腺に蓄積しており、頸部を咬まれた際には皮膚が破れて毒が出てくる仕組みになっている。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては全県的に水田の近傍に多く見られたヘビであったが、平野部ではほぼ絶滅している。また、丘陵地の水田であっても、どこでも見られるヘビではなくなっており、全県的な生息情報の蓄積が望まれる。減少をもたらした要因としては、農薬の使用や餌となるカエル類の減少、土地改良による乾田化、ロードキルによる死亡等、様々な要素が考えられる。

【保全上の留意点】

餌となるカエル類や魚類の保全、湿潤な水辺環境の維持によって良好な生息環境を確保する必要がある。また、水田生態系の食物連鎖の中では比較的上位に位置し、生物濃縮の影響を受けやすいことから、農薬の使用は極力控えることが望ましい。

【特記事項】

かつて無毒蛇と考えられてきたが、いくつかの咬傷例とともに有毒蛇との認識が広まり、本県春日井市で起きた死亡事故（小川他, 1986）を契機に血清の開発がなされた。

【引用文献】

小川弘俊・大村豊・大橋大造・入谷勇夫・加藤政隆・待木雄一, 1986. ヤマカガシ咬傷にて死亡した 1 例および本邦報告例の検討. 日本臨床外科医学会雑誌 47(2): 250-253.

（島田知彦）